

序言

本ディスカッション・ペーパー『装いと規範3——「伝統」と「ナショナル」を問い直す』(CIRAS Discussion Paper No. 95、2020年)は、ワークショップ「装いと規範」第3回(2020年2月10日、京都大学稲盛財団記念館にて開催)の記録を基にしたものである。このワークショップは新学術領域研究(領域提案型)「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて——関係性中心の融合型人文社会科学の確立」(「グローバル関係学」、領域代表：酒井啓子、千葉大学)の計画研究B01「規範とアイデンティティ——社会的紐帯とナショナリズムの間」(研究代表者：酒井啓子)主催、京都大学東南アジア地域研究研究所CIRAS共同利用・共同研究課題「中央ユーラシアのムスリム地域社会における家族と規範——中東との比較分析」(代表：磯貝真澄、東北大学)共催により実施された。

ワークショップ「装いと規範」は、2018年2月10日開催の第1回(成果として帯谷知可・後藤絵美編『装いと規範——現代におけるムスリム女性の選択とその行方』CIRAS Discussion Paper No. 80を2018年3月に刊行)、2019年2月9日開催の第2回(成果として帯谷知可・後藤絵美編『装いと規範2——更新される伝統とその継承』CIRAS Discussion Paper No. 85を2019年3月に刊行)に続き、3回目を迎えることができた。今回のワークショップにおいても、「装いは、価値観や信念、思想、規範など、目には見えないものを映し出す鏡である。その時々々のファッション(流行の装い)に目を向けたとき、我々は、それぞれの時代の人々が、どのような美意識を持ち、何を大切にしていたのか、そして、どのような枠組みの中に生きていたのか、その一端を知ることができる」という当初からの視座を継承した。世界各地の事例を通じて、装いから何が見えてくるのか、そこにおいて「現代」「国家」「イデオロギー」がどのような意味をもちうるのかという問題意識のもと、従来の出発点であったムスリム世界への関心からさらに日本を含む東アジアと南アジアの事例へと目を向けることとなった。

報告者として劉玲芳(大阪大学)、小形道正(京都服飾文化研究財団)、杉本星子(京都文教大学)の3氏を迎えた。コメンテーターは貴志俊彦(京都大学)、森理恵(日本女子大学)、帯谷知可(京都大学)の3名、総合司会は後藤絵美(東京大学)が務めた。当日のプログラムについては本書49ページをご覧ください。以下に各報告について簡略に紹介しておく。

第一報告、劉玲芳「アジアにおける学生服——日本・中国・シンガポールを中心に」は、20世紀初頭の中国の男性服の中で実態の明らかでなかった「学生装」(学生服)に焦点を当て、この学生装と当時の日本の学生服がほぼ同様の形状のものであること、それは日

本を模倣した学校制度の近代化の中で体操科目の導入に伴って清朝末期の新型小学校で体操着として着用され始めたこと、やがてそれが中国国内で男子制服として指定されるようになったことを明らかにしている。さらに、華僑のネットワークを通じた東南アジアへの伝播にも着目し、シンガポールの事例に言及している。

第二報告、小形道正「衣服をめぐる人間との関係——現代社会における和服の変容より」は、社会学の立場から、戦前期から現代に至るまでの和服(着物)の変容を人間との関係において論じるものである。生活着としての着物(作られる着物)は、盛装・正装としての着物(1960年代以降は「女性の幸福」を象徴する、1970年代半ば以降は芸術作品のように鑑賞する、購入し所有する欲望の対象としての着物)へ、さらに現代においてはもはや規範無用のコスプレとしての着物(変身の欲望を体現する借りモノとしての着物)へと変化したとの見解を提示している。

第三報告、杉本星子「グローバル経済とナショナル・ドレスのファッション・トレンド——インド・ウエスタンとGIプロダクト・サリーをめぐる」は、インドのナショナル・ドレスとしてのサリーの変遷を政治・経済・文化の相互作用の中で通時的に描き、グローバル化のなかで生まれた最新トレンドとして、「インド×西洋」のインド・ウエスタン・サリーやフュージョン・サリー、「インド×イスラーム」のヒジャブ・サリーなどが紹介される。現代においてグローバル空間と多民族・多文化なナショナル空間は通底しており、アイデンティティの表象としてのエスニック・ドレスがナショナルをすり抜けてグローバル空間へ容易につながるという重要な指摘がなされている。

三つの報告は、異なる地域の事例を扱い、また、それぞれ歴史学、社会学、人類学という方法論の違いもあったが、いずれも、「伝統」的な装いや「ナショナル」な装いという前提を問い直すという点で共通していた。さらに、伝統を問い、ナショナルを超えたグローバルな関係性を見出そうとした過去2回のワークショップでの議論との接点も見えてきた。コメントおよびディスカッションを通じて明らかになったように、装いと規範をめぐる考察においては、政治・経済・文化・技術といった様々な側面に目配りをし、それらの相互作用の中で分析を行うことが重要である。「伝統」的な、あるいは「ナショナル」な装いの更新や変容については、つねに、そして繰り返し、問い続け、問い直す必要がある。それらは今日において、国家や地域の内に閉じたものではなく、グローバルな市場や運動と容易に結びつくものであり、その点に関して参加者が意識を共有しえた実感している。さらに、議論の中から、興味深い通地的なテーマとして「制服」が浮かび上がってきた。それは、規範とは切り離しえないものであり、さらに今後の議論を深める際の入

り口になるのかもしれないと思われた。

本ディスカッション・ペーパーは、新学術領域研究（領域提案型）「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて——関係性中心の融合型人文社会科学の確立」（「グローバル関係学」、領域代表：酒井啓子、千葉大学法政経学部教授、研究課題／領域番号1801）計画研究B01「規範とアイデンティティ——社会的紐帯とナショナリズムの間」（研究代表者：酒井啓子、研究課題／領域番号16H06549）の2019年度の成果の一部として刊行するものである。

2020年3月

帯谷 知可・後藤 絵美